

DEUTSCHES FILMFESTIVAL IN TOKIO 2006

「日本におけるドイツ年」の公式企画として始まった「ドイツ映画祭」を、日本の観客の要望とドイツ映画界の期待に応え、今年も引き続き開催することになりました。新作10本に加え、今年から4本の短篇も上映します。更に、昨年「ドイツ時代のラングとムルナウ」で好評だったサイレント映画を今年も演奏付きで上映します。今年は、もう一人の巨匠ルビッチを特集します。ドイツ映画の現在と過去をお楽しみください。

入場料

※5作品券ではルビッチ作品はご覧いただけませんので、ご注意ください。

前売券	指定席1回券 (各回72席)	自由席1回券 (日時のみ指定)	ルビッチ指定席1回券 (演奏付き、各回72席)	ルビッチ自由席1回券 (演奏付き、日時指定)	5作品券 (限定400枚)	パスポート予約券 (限定200枚)
一般	1,500円	1,300円	2,200円	2,000円	5,500円	12,000円
学生・60才以上	1,400円	1,200円	2,000円	1,800円	4,500円	10,000円
当日券	指定席1回券 (各回72席)	自由席1回券 (日時のみ指定)	ルビッチ指定席1回券 (演奏付き、各回72席)	ルビッチ自由席1回券 (演奏付き、日時指定)		
一般	1,700円	1,500円	2,400円	2,200円		
学生・60才以上	1,600円	1,400円	2,200円	2,000円		

前売券をお買い求めの方へ

〔発売日〕6月3日(土)AM10:00から(コンビニエンスストアは発売初日のみ正午から)

〔購入方法〕

①お近くのチケットぴあ窓口で直接購入

②電話予約後、店頭で受け取り

チケットぴあ／音声認識予約：0570(02)9999

(AM10:00からPM11:30、オペレーター対応はPM6:00まで)

③ファミリーマート、サークルK、サンクスで直接購入

Pコード：指定席1回券＝552-146／自由席1回券＝552-147

ルビッチ指定席1回券＝552-148／ルビッチ自由席1回券＝552-149

5作品券＝476-051／パスポート予約券＝476-052

5作品券をお買い求めの方へ

ルビッチ作品は、5作品券ではご覧いただけませんのでご注意ください。また5作品券では、指定席はご利用いただけません。

5作品券は日時指定ではありませんので、ご来場の初日に日時指定券に引き換えてください。チケットを購入後、7月13日(木)までにあらかじめ下記の内容をFAX、e-mail、ハガキのいずれかでお知らせ頂ければ、ご希望回分の日時指定券のご用意が可能です。予約されずに当日会場の日時を指定された場合、券のご用意にお時間がかかる場合があります。本券は、複数のお客様によるご使用はできません。

〔記入事項〕

①5作品券に印字された予約番号 ②名前

③住所・電話番号 ④ご希望の作品と、その上映日時

〔宛先〕ドイツ映画祭事務局

FAX:03-3265-5659 e-mail:germanff@pff.jp

ハガキ：〒102-8661 東京都麹町郵便局私書箱75号

パスポート予約券をお買い求めの方へ

パスポートをお持ちのお客様は、上映期間中にすべての回をご覧いただくことができます。ただし、各回入れ替え制です。また、指定席はご利用いただけません。ご来場の初日に会場入り口にてパスポート予約券をパスポートと引き換えてください。この時、パスポートにお名前のご記入をお願いいたします。複数のお客様によるご使用はできません。紛失の際の再発行はいたしかねますので、ご注意ください。

「プレリザーブ」(インターネット先行抽選発売)について

ルビッチ指定席1回券とパスポート予約券のみプレリザーブのお申し込みができます。受付開始は5月26日(金)PM6:00、受付終了は6月2日(金)AM9:00、抽選は6月2日(金)夕方。詳細は、電子チケットぴあホームページ(<http://info.pia.co.jp/et/promo/cinema/de2006.jsp>)をご参照ください。

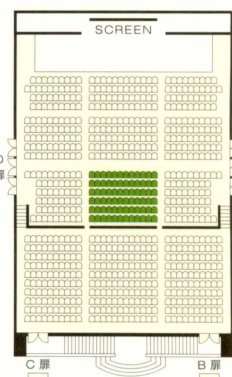
指定席について

右図の指定席区域のお席をご用意いたします。前売分で指定席が売り切れた場合、当日分の指定席は販売いたしません。

上映開始後は場内が暗いため、お手持ちのチケットの指定席にご案内できない場合がございます。上映開始時刻に遅れないようご来場ください。

パスポート、5作品券、自由席1回券でご来場の方には、指定席はご利用いただけません。

●：指定席区域(各回72席)



入場整理券について

パスポート、5作品券、自由席1回券をお持ちのお客様には、各回の入場整理券を、上映当日のAM9:30(初日はAM11:00)から配布します。なお、指定席券をお持ちの方は、入場整理券は不要です。

注意事項

①1回券の前売券の電話予約は各上映の5日前までです。直接購入は各上映の2日前までとなります。

②5作品券、パスポート予約券の電話予約は7月10日(月)までです。直接購入は7月12日(水)までとなります。

③前売券の払い戻し、交換、再発券はいたしません。

④当日券はその日の上映分をAM9:30(初日はAM11:00)から売り出します。

⑤高・専・大生、60歳以上の方は、チケット購入時及びご来場時に必ず身分の証明となるものをお持ちください。

pia.jp/t
電子チケット
ぴあ
0570-02-9999

DEUTSCHES FILMFESTIVAL IN TOKIO 2006

horizonte



ドイツ映画祭2006

2006年7月16日[日]----20日[木] 有楽町朝日ホール 東京都千代田区有楽町2-5-1 マリオン11階

主催：朝日新聞社、ドイツ映画輸出協会、東京ドイツ文化センター

協力：ムルナウ財団、トランジットフィルム、ニッポン・シネ・テレビ・コーポレーション／運営協力：ぴあ株式会社／宣伝協力：パンドラ

お問い合わせ：03-3265-1979 (ドイツ映画祭事務局、6月1日～7月14日、平日のみ10:00～18:00) 03-3215-9660(会場、会期中のみ)



german
films

GOETHE-INSTITUT
TOKYO
東京ドイツ文化センター

DAIMLERCHRYSLER

FRIEDRICH
WILHELM
MURNAU
STIFTUNG

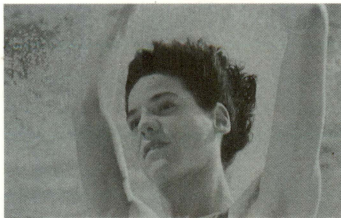
TRANSIT FILM



『血の結婚式』

2005年、ドミニク・デュレ監督、87分
Die Bluthochzeit (Dominique Deruddere)

息子の結婚披露パーティーを古城レストランで開いた大富豪ヴルツァーは、前菜の味に不満を抱き、即座に全員で引き上げようとする。その態度に腹立たしたシェフは、トイレに入っていた新婦たちを人質にとる。両者のにらみ合いは、やがて流血の惨事へと発展する……。U・オクセンクネヒトとA・ローデという二大スターの競演が見もの。『エブリバディ・フェイマス』(2000)でアカデミー外国語映画賞にノミネートされた実績をもつ監督デュレが、コミックを原作に撮った緊迫感溢れるブラック・コメディ。



『3度下がれば』

2005年、フロリアン・ホフマイスター監督、104分
3 Grad kälter (Florian Hoffmeister)

親しい友人たちに囲まれて充実した日々を送っていたヤンが、とつぜん姿を消す。恋人のマリー、親友フランクらは大きな空白を抱えて生きなければならなくなる。ヤンが以前と変わらぬ姿で戻ってきたのは五年後だった。その出現は、まだ彼を愛しているマリー、マリーの夫となっていたフランクだけでなく、周辺のあらゆる人々の心に波紋を投げかける。カメラマンとしてすぐれた実績をもつホフマイスターは、現代人の心にひそむ孤独と不安を端整な映像、静謐なタッチで描き出した。ロカルノ国際映画祭「銀豹賞」受賞。



『異国の肌』

2005年、アンジェリーナ・マッカロネ監督、97分
Fremde Haut (Angelina Maccarone)

既婚女性との関係を手々に知られ、迫害を恐れたイラン女性ファリバは、ドイツへと逃れる。入管で止められた彼女は、自殺した同国人男性の身分証明書を使って入国をはかる。田舎の収容施設へと送られたファリバは、男性として工場で働くうちに、同僚のアンネと好意を寄せ合うようになる。その「恋」には、大きな危険が伴っていた……。女性監督マッカロネが難民問題、同性愛を中心に据えて現代ドイツの一面を鋭く切り取った秀作。カルロヴィ・ヴァリ国際映画祭、ワルシャワ国際映画祭等で熱い賞賛を受けた。



『マサイの恋人』

2005年、ヘルミーネ・フントゲブルト監督、126分
Die weiße Massai (Hermine Huntgeburth)

コリンヌ・ホーフマンの自伝的ベストセラー小説(邦訳あり)の映画化で、昨年のドイツで最高の観客数を記録した。ボーイフレンドとケニアを訪れていたカローラは、伝統的衣装を身にまとったマサイの戦士と知り合って落ちる。彼女は帰国をとりやめ、彼を捜す。ついに再会を果たした両者は結婚して子供をもうけるが、文化のギャップが両者を苦しめる。美しくも広大なアフリカの自然を背景に、女性監督ならではの繊細な演出で展開されるラヴストーリー。トロント国際映画祭出品、バイエルン映画賞主演女優賞(ニーナ・ホス)。

ルビッチ再発見

Ernst Lubitsch



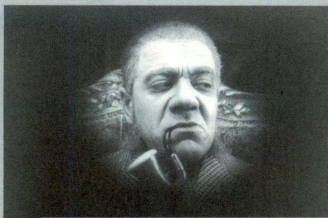
エルンスト・ルビッチ監督のドイツ時代の4作品の最新復元版をピアノ付きで上映します。演奏は、昨年の「ドイツ時代のラングとムルナウ」で来日し、観客を熱狂させたアリョーシャ・ツィンマーマン氏の予定です。ルビッチは彼が最も得意とするレパートリーです。



『陽気な監獄』

Das fidele Gefängnis
1917年、48分＝20コマ／秒

シュトラウスのオペレッタ『こもり』を下敷きとする軽快な喜劇。遊び人アレックスの自宅に、24時間の服役命令書が届けられる。妻アリーツェは、買い物中につきまとってきた男エーゴンを、「夫」として警察署長に引き渡す。舞踏会に出かけたアレックスは、仮面の美女(実はアリーツェ)をくどいているうちに、結婚指輪を盗まれてしまう……。広い舞踏会場の場面は視覚的にきわめて刺激的に構成されており、のちにルビッチがスペクタクル映画をまかされたのも当然のなりゆきだったと思われるだろう。日本初公開。



『牡蠣の王女』

Die Austerprinzessin
1919年、58分＝20コマ／秒

大金持ちの「牡蠣の王」が、娘オッシーの結婚相手として「王子」を捜す。結婚幹旋業者から紹介されたのは、没落貴族ヌキだった。ヌキの代理で屋敷に出かけた召使のヨゼフが、そのままオッシーと結婚式をあげる。「アレル中撲滅運動」にとりくむオッシーの前に、泥酔したヌキが連れてこられる……。富豪の生活のグロテスクな描写、大勢の人間を装飾として活用する手法が楽しい。見逃せないのは、のちにルビッチ自身が「あの演出で私は喜劇映画に開眼した」と語ったことで有名な、ヨゼフが広間で待たされる場面である。



『男だったら』

Ich möchte kein Mann sein
1920年、41分＝20コマ／秒

大富豪の家庭で甘やかされて育ったオッシーは、新しく雇われた家庭教師、ケルステン博士に子供扱いされて憤慨する。男だったらこんな目に遭うまいと考えた彼女は男装して街へ出るが、想像もしなかった困難に苦しめられる。パーティー会場でオッシーはケルステン博士と出会い、「男性同士」として意気投合する……。のちのルビッチ映画の重要なテーマとなる(仮装)もしくは(変装)を中心に据えた、ハイテンポで展開される傑作喜劇。乱暴な娘が恋のせいで別人のような性格へ変わっていく過程が見どころ。日本初公開。



『山猫リシュカ』

Die Bergkatze
1921年、90分＝20コマ／秒

ブレイボーイの少尉アレックスは、高山の砦へ転勤を命じられる。赴任の途中、山賊の娘、男まじりのリシュカと彼が心を通い合わせたことから、大混戦劇がはじまる……。ルビッチ全作品のなかでももっともラディカルなギャグに満ちた作品。遊び心に満ちた大胆なフォルムから構成されるセットはまさに驚異的である。「カリガリ博士」と同時代の、表現主義映画作家としての側面がここには如実に現れている。当時のルビッチが(山岳映画)の達人でもあったという意外な面も示す、実験的で斬新な一本。日本初公開。

そしてドイツ映画は続く 瀬川裕司

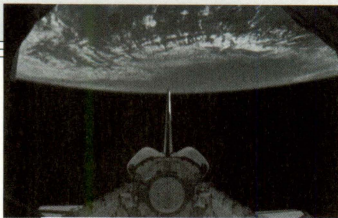
ワールドカップ開催で世界の注目を集め、映画産出国としても好調を維持しているドイツから、今年も選りすぐりの魅力的な新作がやってくる。

まず目を惹くのは、『マサイの恋人』『裸足の女』『素粒子』という大ヒット作品が揃ったことであろう。白人女性とマサイの戦士と恋を描いた『マサイの恋人』は美しい風景と劇的な展開で人々の感動を呼んだ作品だし、ドイツ最高のスターであるT・シュヴァイガーが主演・監督した『裸足の女』は、心温まる(癒し)の物語である。昨年『アグネスと彼の兄弟』で日本の観客に強い衝撃を与えたレーラーは、M・ウエルベックの話題の小説と切り結んだ『素粒子』によって、新しい境地を切り拓いたと評判だ。

カメラマンとして傑出した実績を残してきたF・ホフマイスターの『3度下がれば』、日独交流の象徴ともいべきデリエの『漁師と妻』、イタリア系女性監督による

『異国の肌』も、現代ドイツの側面をユニークに、しかも繊細に切り取った傑作である。またファンにとって見逃せないのは、(ニュー・ジャーマン・シネマ)の中心人物としてその名をとどろかせたヘルツォークが、長いキャリアのひとつの到達点ともいえる『ワイルド・ブルー・ヨンダー』で元気な姿を見せてくれることであろう。

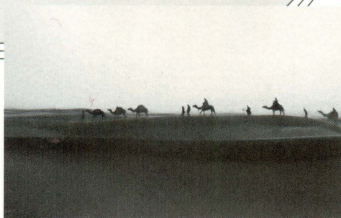
そしてルビッチ。ハリウッドでの〈洗練された喜劇〉の巨匠としての評価はわが国でも定着している。しかし、『寵姫ズムルン』等の超大作を手がける前の、不条理でスラップスティック的要素の強いドイツ時代の中短編については十分に紹介されてこなかった。それらの作品に関しては、世界的規模での再発見および修復の作業が続けられてきたが、今回は17年から21年までの時期の、新進映画監督としての勢いを感じさせる作品が四本も揃った。映画ファンなら躊躇なく会場に駆けつけるしかないだろう。



『ワイルド・ブルー・ヨンダー』

2005年、ヴェルナー・ヘルツォーク監督、81分
The Wild Blue Yonder (Werner Herzog)

〈ニュー・ジャーマン・シネマの旗手〉として君臨したヘルツォークが健在ぶりを見せつける待望の新作。人が住めなくなった地球。帰還できぬまま、無重力状態で生活を続ける宇宙船の乗務員たち。無人の地上では、エイリアンが故郷の星に思いを馳せている。最初期から〈人間が存在する以前の始原的風景〉〈誰も見たことのない景色〉にこだわってきたヘルツォーク独特の映像世界は、まさしく感動的である。監督自身が(SFファンタジー)と呼ぶこの作品はヴェネチア国際映画祭で絶賛され、国際批評家連盟賞を受けた。



『サウンド・オブ・エタニティー』

2005年、バスチャン・クレーフ監督、107分
Klang der Ewigkeit (Bastian Cleve)

J・S・バッハが晩年に作曲した「短調ミサ曲」の作品世界を映像に変換しようとした画期的な試み。短編映画で過去に多くの受賞歴を誇る監督クレーフは、曲を構成する27のパートを緻密に分析し、それぞれにふさわしい同数の映像を振り上げた。つまり観客＝聴衆は、二時間のミサ曲を耳にしながら、永遠、希望、調和、輪廻転生などをテーマとする短編27本を次々と目にするようになる。多彩な工夫がこらされ、高度な技術が投入された映像は珠玉の輝きを放ち、人々を甘美な陶酔へと誘わずにはいまい。



『黒い雲』

[プレミア上映]
2006年、グレゴール・シュニッツラー監督、107分
Die Wolke (Gregor Schnitzler)

チェルノブイリ原発事故の翌年に発表され、「ドイツ青少年文学賞」に輝いたベストセラー小説(邦訳「見えない雲」)を、〈20年後〉の節目に映画化した話題の作品。フランクフルト南西の田園地帯にある原子力発電所で、深刻な事故が起こる。迫り来る放射能雲から逃げどう人々のかに、十六歳のハンナと恋人のフランクもいた。彼らは生きのびられるのか、ふたりの愛はどうなるのか。監督シュニッツラーは、究極のパニック状況から美しい恋愛映画を生み出すことに成功した。今冬、シネカノン有楽町ほかで公開予定。



『素粒子』

[プレミア上映]
2006年、オスカー・レーラー監督、113分
Elementarteilchen (Oskar Roehler)

全ヨーロッパで熱い議論を喚起したミシェル・ウエルベックの小説(邦訳あり)を、〈ファスビンダーの後継者〉として注目を集めるレーラーが映画化したセンセーショナルな傑作。 hippie世代に属する母のもとに生まれた異父兄弟、性的欲求不満に苦しむ作家志望のブルーノと、女性には淡泊な天才科学者のミハエル。レーラーは、心に深い傷を負った両者が、人生と苦闘する姿を鋭いタッチで描き出す。06年ベルリン国際映画祭でブルーノ役のモーリッツ・ブライプトロイは銀熊賞(主演男優賞)に輝いた。今秋公開予定。

短編

Kurzfilm

a 『悲鳴』

Quietsch (Baran Bo Odar)
2005年、バラン・ボ・オダー監督、7分

c 『火曜日』

Dienstag (Robert Wiezorek)
2004年、ロバート・ヴィズレック、9分

b 『ディスタント・メモリー』

Maries Lächeln (Michael Schäfer)
2005年、ミハエル・シェーファー監督、9分50秒

d 『女性／男性』

Female/Male (Daniel Lang)
2005年、ダニエル・ラング監督、3分

上映プログラム

7月16日(日)	12:00～	b+C	14:45～	W+X	17:30～	D
17日(月・祝)	10:30～	E	13:15～	c+G	15:00～	座談会
18日(火)	10:30～	a+B	13:15～	H	16:00～	A
19日(水)	10:30～	D	13:30～	b+C	16:10～	E
20日(木)	10:30～	d+F	13:15～	I	15:45～	c+G
					18:15～	J

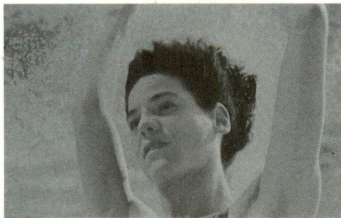
各回入れ替え制、定員776名、開場は上映20分前です。座談会は入場無料です。7月16日(日)17:30～の上映前に開会式(約30分間)があります。



『血の結婚式』

2005年、ドミニク・デュレ監督、87分
Die Bluthochzeit (Dominique Deruddere)

息子の結婚披露パーティーを古城レストランで開いた大富豪ヴルツァーは、前菜の味に不満を抱き、即座に全員で引き上げようとする。その態度に腹立たしたシェフは、トイレに入っていた新婦たちを人質にとる。両者のにらみ合いは、やがて流血の惨事へと発展する……。U・オクセンクネヒトとA・ローデという二大スターの競演が見もの。『エブリバディ・フェイマス』(2000)でアカデミー外国語映画賞にノミネートされた実績をもつ監督デュレが、コミックを原作に撮った緊迫感溢れるブラック・コメディ。



『3度下がれば』

2005年、フロリアン・ホフマイスター監督、104分
3 Grad kälter (Florian Hoffmeister)

親しい友人たちに囲まれて充実した日々を送っていたヤンが、とつぜん姿を消す。恋人のマリー、親友フランクらは大きな空白を抱えて生きなければならない。ヤンが以前と変わらぬ姿で戻ってきたのは五年後だった。その出現は、まだ彼を愛しているマリー、マリーの夫となっていたフランクだけでなく、周辺のあらゆる人々の心に波紋を投げかける。カメラマンとしてすぐれた実績をもつホフマイスターは、現代人の心にひそむ孤独と不安を端整な映像、静謐なタッチで描き出した。ロカルノ国際映画祭「銀豹賞」受賞。



『異国の肌』

2005年、アンジェリーナ・マッカロネ監督、97分
Fremde Haut (Angelina Maccarone)

既婚女性との関係を手々に知られ、迫害を恐れたイラン女性ファリバは、ドイツへと逃れる。入管で止められた彼女は、自殺した同国人男性の身分証明書を使って入国をはかる。田舎の収容施設へと送られたファリバは、男性として工場で働くうちに、同僚のアンネと好意を寄せ合うようになる。その「恋」には、大きな危険が伴っていた……。女性監督マッカロネが難民問題、同性愛を中心に据えて現代ドイツの一面を鋭く切り取った秀作。カルロヴィ・ヴァリ国際映画祭、ワルシャワ国際映画祭等で熱い賞賛を受けた。



『マサイの恋人』

2005年、ヘルミーネ・フントゲブルト監督、126分
Die weiße Massai (Hermine Huntgeburth)

コリンヌ・ホーフマンの自伝的ベストセラー小説(邦訳あり)の映画化で、昨年のドイツで最高の観客数を記録した。ボーイフレンドとケニアを訪れていたカローラは、伝統的衣装を身にまとったマサイの戦士と知り合って恋に落ちる。彼女は帰国をとりやめ、彼を捜す。ついに再会を果たした両者は結婚して子供をもうけるが、文化のギャップが両者を苦しめる。美しくも広大なアフリカの自然を背景に、女性監督ならではの繊細な演出で展開されるラヴストーリー。トロント国際映画祭出品、バイエルン映画賞主演女優賞(ニーナ・ホス)。

ルビッチ再発見

Ernst Lubitsch



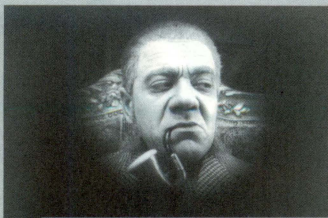
エルンスト・ルビッチ監督のドイツ時代の4作品の最新復元版をピアノ付きで上映します。演奏は、昨年の「ドイツ時代のラングとムルナウ」で来日し、観客を熱狂させたアリョーシャ・ツィンマーマン氏の予定です。ルビッチは彼が最も得意とするレパートリーです。



『陽気な監獄』

Das fidele Gefängnis
1917年、48分＝20コマ／秒

シュトラウスのオペレッタ『こもり』を下敷きとする軽快な喜劇。遊び人アレックスの自宅に、24時間の服役命令書が届けられる。妻アリーツェは、買い物中につきまとってきた男エーゴンを、「夫」として警察署長に引き渡す。舞踏会に出かけたアレックスは、仮面の美女(実はアリーツェ)をくどいているうちに、結婚指輪を盗まれてしまう……。広い舞踏会場の場面は視覚的にきわめて刺激的に構成されており、のちにルビッチがスペクタクル映画をまかされたのも当然のなりゆきだったと思われるだろう。日本初公開。



『牡蠣の王女』

Die Austerprinzessin
1919年、58分＝20コマ／秒

大金持ちの「牡蠣の王」が、娘オッシーの結婚相手として「王子」を捜す。結婚幹旋業者から紹介されたのは、没落貴族ヌキだった。ヌキの代理で屋敷に出かけた召使のヨゼフが、そのままオッシーと結婚式をあげる。「アレル中撲滅運動」にとりくむオッシーの前に、泥酔したヌキが連れてこられる……。富豪の生活のグロテスクな描写、大勢の人間を装飾として活用する手法が楽しい。見逃せないのは、のちにルビッチ自身が「あの演出で私は喜劇映画に開眼した」と語ったことで有名な、ヨゼフが広間で待たされる場面である。



『男だったら』

Ich möchte kein Mann sein
1920年、41分＝20コマ／秒

大富豪の家庭で甘やかされて育ったオッシーは、新しく雇われた家庭教師、ケルステン博士に子供扱いされて憤慨する。男だったらこんな目に遭うまいと考えた彼女は男装して街へ出るが、想像もしなかった困難に苦しめられる。パーティー会場でオッシーはケルステン博士と出会い、「男性同士」として意気投合する……。のちのルビッチ映画の重要なテーマとなる(仮装)もしくは(変装)を中心に据えた、ハイテンポで展開される傑作喜劇。乱暴な娘が恋のせいで別人のような性格へ変わっていく過程が見どころ。日本初公開。



『山猫リシュカ』

Die Bergkatze
1921年、90分＝20コマ／秒

ブレイボーイの少尉アレックスは、高山の砦へ転勤を命じられる。赴任の途中、山賊の娘、男まじりのリシュカと彼が心を通い合わせたことから、大混戦劇がはじまる……。ルビッチ全作品のなかでももっともラディカルなギャグに満ちた作品。遊び心に満ちた大胆なフォルムから構成されるセットはまさに驚異的である。「カリガリ博士」と同時代の、表現主義映画作家としての側面がここには如実に現れている。当時のルビッチが(山岳映画)の達人でもあったという意外な面も示す、実験的で斬新な一本。日本初公開。

そしてドイツ映画は続く 瀬川裕司

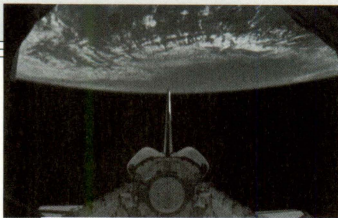
ワールドカップ開催で世界の注目を集め、映画産出国としても好調を維持しているドイツから、今年も選りすぐりの魅力的な新作がやってくる。

まず目を惹くのは、『マサイの恋人』『裸足の女』『素粒子』という大ヒット作品が揃ったことであろう。白人女性とマサイの戦士と恋を描いた『マサイの恋人』は美しい風景と劇的な展開で人々の感動を呼んだ作品だし、ドイツ最高のスターであるT・シュヴァイガーが主演・監督した『裸足の女』は、心温まる(癒し)の物語である。昨年『アグネスと彼の兄弟』で日本の観客に強い衝撃を与えたレーラーは、M・ウエルベックの話題の小説と切り結んだ『素粒子』によって、新しい境地を切り拓いたと評判だ。

カメラマンとして傑出した実績を残してきたF・ホフマイスターの『3度下がれば』、日独交流の象徴ともいべきデリエの『漁師と妻』、イタリア系女性監督による

『異国の肌』も、現代ドイツの側面をユニークに、しかも繊細に切り取った傑作である。またファンにとって見逃せないのは、(ニュー・ジャーマン・シネマ)の中心人物としてその名をとどろかせたヘルツォークが、長いキャリアのひとつの到達点ともいえる『ワイルド・ブルー・ヨンダー』で元気な姿を見せてくれることであろう。

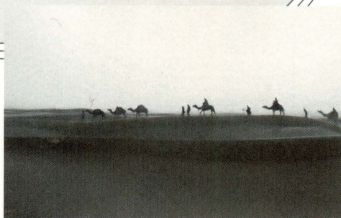
そしてルビッチ。ハリウッドでの〈洗練された喜劇〉の巨匠としての評価はわが国でも定着している。しかし、『寵姫ズムルン』等の超大作を手がける前の、不条理でスラップスティック的要素の強いドイツ時代の中短編については十分に紹介されてこなかった。それらの作品に関しては、世界的規模での再発見および修復の作業が続けられてきたが、今回は17年から21年までの時期の、新進映画監督としての勢いを感じさせる作品が四本も揃った。映画ファンなら躊躇なく会場に駆けつけるしかないだろう。



『ワイルド・ブルー・ヨンダー』

2005年、ヴェルナー・ヘルツォーク監督、81分
The Wild Blue Yonder (Werner Herzog)

〈ニュー・ジャーマン・シネマの旗手〉として君臨したヘルツォークが健在ぶりを見せつける待望の新作。人が住めなくなった地球。帰還できぬまま、無重力状態で生活を続ける宇宙船の乗務員たち。無人の地上では、エイリアンが故郷の星に思いを馳せている。最初期から〈人間が存在する以前の始原的風景〉〈誰も見たことのない景色〉にこだわってきたヘルツォーク独特の映像世界は、まさしく感動的である。監督自身が(SFファンタジー)と呼ぶこの作品はヴェネチア国際映画祭で絶賛され、国際批評家連盟賞を受けた。



『サウンド・オブ・エタニティー』

2005年、バスチャン・クレーフ監督、107分
Klang der Ewigkeit (Bastian Cleve)

J・S・バッハが晩年に作曲した「短調ミサ曲」の作品世界を映像に変換しようとした画期的な試み。短編映画で過去に多くの受賞歴を誇る監督クレーフは、曲を構成する27のパートを緻密に分析し、それぞれにふさわしい同数の映像を振り上げた。つまり観客＝聴衆は、二時間のミサ曲を耳にしながら、永遠、希望、調和、輪廻転生などをテーマとする短編27本を次々と目にするようになる。多彩な工夫がこらされ、高度な技術が投入された映像は珠玉の輝きを放ち、人々を甘美な陶酔へと誘わずにはいまい。



『黒い雲』

[プレミア上映]
2006年、グレゴール・シュニッツラー監督、107分
Die Wolke (Gregor Schnitzler)

チェルノブイリ原発事故の翌年に発表され、「ドイツ青少年文学賞」に輝いたベストセラー小説(邦訳「見えない雲」)を、〈20年後〉の節目に映画化した話題の作品。フランクフルト南西の田園地帯にある原子力発電所で、深刻な事故が起こる。迫り来る放射能雲から逃げどう人々のかに、十六歳のハンナと恋人のフランクもいた。彼らは生きのびられるのか、ふたりの愛はどうなるのか。監督シュニッツラーは、究極のパニック状況から美しい恋愛映画を生み出すことに成功した。今冬、シネカノン有楽町ほかで公開予定。



『素粒子』

[プレミア上映]
2006年、オスカー・レーラー監督、113分
Elementarteilchen (Oskar Roehler)

全ヨーロッパで熱い議論を喚起したミシェル・ウエルベックの小説(邦訳あり)を、〈ファスビンダーの後継者〉として注目を集めるレーラーが映画化したセンセーショナルな傑作。 hippie世代に属する母のもとに生まれた異父兄弟、性的欲求不満に苦しむ作家志望のブルーノと、女性には淡白な天才科学者のミハエル。レーラーは、心に深い傷を負った両者が、人生と苦闘する姿を鋭いタッチで描き出す。06年ベルリン国際映画祭でブルーノ役のモーリッツ・ブライプトロイは銀熊賞(主演男優賞)に輝いた。今秋公開予定。

短編

Kurzfilm

a 『悲鳴』

Quietsch (Baran Bo Odar)
2005年、バラン・ボ・オダー監督、7分

c 『火曜日』

Dienstag (Robert Wiezorek)
2004年、ロバート・ヴィズレック、9分

b 『ディスタント・メモリー』

Maries Lächeln (Michael Schäfer)
2005年、ミハエル・シェーファー監督、9分50秒

d 『女性／男性』

Female/Male (Daniel Lang)
2005年、ダニエル・ラング監督、3分

上映プログラム

7月16日(日)	12:00～	b+C	14:45～	W+X	17:30～	D
17日(月・祝)	10:30～	E	13:15～	c+G	15:00～	座談会
18日(火)	10:30～	a+B	13:15～	H	16:00～	A
19日(水)	10:30～	D	13:30～	b+C	16:10～	E
20日(木)	10:30～	d+F	13:15～	I	15:45～	c+G
					18:15～	J

各回入れ替え制、定員776名、開場は上映20分前です。座談会は入場無料です。7月16日(日)17:30～の上映前に開会式(約30分間)があります。